

1 Ap-3(P) 高齢化の進展過程における家族関係の世代間比較

—新座市の中・高年層調査より—

十文字学園女短大 ○横田京 古松弥生 宮城道子 波多野和彦

目的：少子化・高齢化社会の進展とともに、人々の価値観やライフスタイルもますます多様化すると予測される。変化する時代に対応して、豊かに生きる家族のありかたを探ることを目的として、家族関係の世代間比較を行った。

方法：1994年6月に、新座市在住の65歳以上の在宅高齢男女1698名、45歳から54歳の中年男女1730名にアンケート調査を行った結果と1984年から5年毎に実施した2回の高齢者の調査結果とを合わせて考察する。

結果：おもな結果はつぎの通りである。

従来、家族の機能として期待されてきた老親の扶養と介護についてみると、高齢化の進展と家族形態の変化により、世代間に差異が見られる。本調査における同居率は、中年層では、現在同居している人と今後同居するつもりの人を加えても高年層より低く今後同居による扶養や介護は期待されなくなる傾向がうかがえる。「だれに介護をしてもらいたいか」の質問にたいしては、高年・中年に違いがみられ、同居の既婚子への期待は高年層に高く約30%であるが、中年層は低く約10%である。約10%は公的ホームヘルパーに頼る希望を持っている。配偶者への期待は中年層の方が高く約56%であるが高年層は約30%である。「人生における大切なものは何か」の問に対し、中年・高年ともに約90%が「健康」をあげ、「家族・家庭」「趣味」「友人」は、高年層よりも中年層の方が高い傾向がある。中年層では豊かに生きるために、家族を大切にすると同時に、趣味を持ち、友人との交流を望んでいることがうかがえる。